

## 「戦争責任告白」

2017年03月26日

1967年、50年前の今日の3月26日の復活主日に、時の日本基督教団総会議長 鈴木正久牧師の名で「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白（以下「戦責告白」）」が出された。この年、私は神学校を卒業し、下谷教会の伝道師になった。「戦責告白」が出された経緯については知らなかったが、東京では、賛成反対について喧々諤々の議論があり、私は熱心に集会に参加した。反対する人々は下記のように主張していた。あの時代、戦争に反対することなどできなかつた。「戦責告白」が出されると、戦時中、教団を守ろうとした先輩たちの苦労を無にするものであり、自分たちの伝道が全否定されることになると。鈴木牧師は明快な凛とした言葉で、「戦責告白」の必要性を訴えていた。「戦責告白」は、当時の教団指導者を追及するものではない。先輩たちを父親のように感じている。しかし、キリストの教会として「明日の教団」を建てるために、自分たちの告白として出さなければならないと。

私の牧師生活は「戦責告白」を問い、関り続けることであつた。まず、教団の誕生と戦時中の教団の歩みを知ろうとした。国は戦争遂行のために諸団体の管理を円滑にするためプロテスタント諸教会の合同を要請した。1941年、私が生まれた年、要請に応じて合同し、教団は誕生した。合同した教団の規約の第七条の生活綱領は、「一 皇国ノ道ニ従ヒテ信仰ニ徹シ各其ノ分ヲ尽シテ皇運ヲ扶翼シ奉ルベシ」とキリスト教信仰より皇国史観を優先している。教団が戦争遂行に協力するのは必然的であつた。国民儀礼としての君が代斉唱や宮城遥拝、大政翼賛宣言、必勝祈禱会、愛国機献納献金などを行い、また、アジア諸国へ神社参拝を強要し、「日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰」を送り、アジア解放の聖戦として大東亜戦争への協力を訴えている。そのことのため、朝鮮では、神社参拝を拒否した多くのクリスチャンが殉教死している。残された資料から、国策に追従した実態は歴然としている。

戦後は、米国の民主主義が礼賛され、教会に多くの人々は押し寄せた。教団は好機とばかり、伝道に力を入れた。この時、戦争責任についての認識は希薄であつた。戦時中の教団統理 富田満牧師は、そのまま統理を続け、戦後最初に行われた常議員会で、戦争責任問題が問われたが、統理は「余ハ戦争責任者ナリトハ思ハズ、サレド責任ヲ感ジテ辞職スベキ者ナリトセバ今辞職スルハ軽キ事ナリ。タゞ重要責務山積セル今日直ニ辞職スルハ反ツテ無責任ナリ」と答えている。戦時中、苦い思いをしてきた若い牧師たちは戦争責任問題を不可避であると考え、討論を積み重ねてきた。過去の罪を個人的に告発するのではなく、戦争責任を自らの罪として告白することによって、キリストの教会になるという神学に裏打ちされたものであつた。そこには、ドイツの教会闘争、シュトゥットガルト罪責宣言などからの学びがあり、アジアの諸教会からの認知を得たいという認識があつた。教団総会で「戦責告白」を出すことが承認され、常議委員会で賛成多数で、公にすることを決議した。教団の歴史的転換であつた。

アジア太平洋戦争での朝鮮支配の実態、中国帰還者連絡会の人々の率直な告白などを通して、侵略戦争の実態を知らされた。旧満州で生まれた私は中国侵略者の末裔であると知り、「戦責告白」は自分のものとなつた。以来、「戦責告白」に立ち平和を求め、諸集会に参加し続けた。「九条の会」への関りは私の「キリスト告白」である。戦争に向かおうとしている今日、「戦責告白」は罪責を踏まえ、平和を希求する教団の立脚点である。